【第158号　二〇一八年 二月 五日発行】

福音の園だより

平成18年度「高年齢者雇用優良事業所 協会会長賞」受賞
平成27年度「介護職員確保・定着の為の優れた取組」表彰

グループホーム・デイサービス介護保険事業者指定
３５０－００１６ 埼玉県川越市木野目一八七八番地一
特定非営利活動法人 **福音の園・埼玉　事務局**
☎０４９－２３０－１１１１(FAX２３０－１１１２)

理念・方針説明

「私はずっと栃木弁で作曲している」

グループホーム **福音の園・川越** ホーム長 杉澤 卓巳

昨年２月１６日、作曲家・船村 徹さんが８４年の生涯を閉じた。生涯で５，０００曲もの歌を作った。

「歌は言葉なんだ。ちゃんと言葉を話せる人でなければ日本の歌は歌えない」と語っておられた。

コンビを組んだ作詞家の高野公男さんが、「俺は自分の**茨城弁で詞を書いている**。お前も格好つけずに自分の栃木弁で作曲しろ」と船村 徹さんに話した。

「メロディーだって**自分の言葉で書かなければ**表現できないと教わった。それ以来、わたしはずっと**栃木弁で作曲している**」――作曲家・船村 徹さんを偲んで、故人の声を紹介した朝刊記事に心を動かされた。

「茨城弁で詞を書く」、「メロディーを自分の言葉で書く」、「栃木弁で曲を作る」とは、いったい何を意味しているのか？

※　※　※　※　※

社会福祉施設管理者研修「人材づくりとは何か」で、「リーダーに求められる要素」の一つが**「自らの言葉を持っている人」**。「私の考えるリーダーに求められる要素とは、**自らの言葉をたくさん持っている人、自分の言葉できちんと話せる人**」と解説された。

確かに、「介護の仕事をしています」と言うとき、「言葉」で仕事をしていることに気が付いていない。だから、「言葉」より先に「手を出して」しまい暴力（暴言や虐待）になってしまうのが実態。

船村 徹さんの言葉は、きちんと話せる「自分の言葉」から更に一歩踏み込んでおられる。特段 格好つけている訳でもないだろう「標準語」でなく、生まれ故郷の「茨城弁、栃木弁で仕事しろ！」と。

※　※　※　※　※　※

「認知症」でも失われないものとは？

発する「言葉」の背後にある真実を求め続けてきた。探求の途上、本誌に次の一文を記してきた。

『ご入居当時より回数は減ったものの玄関に立たれる。「Sさん、どちらまで？」 不安そうな顔で「お父さんとお母さんが心配してるからツジマタまで帰るの！」と繰り返される。これはいわゆる「帰宅願望」とは異なる。所帯を持って築いた「夫氏と暮らした家」ではなく、〝うさぎ追いしかの山、小鮒つりしかの川。いかにいます父母 夢はいまもめぐりて、忘れがたき故郷〟と唄う生まれ故郷への郷愁である。けれど「帰りたい」生まれ故郷へお連れしたとしても解消されないであろう内心（魂）の不安を見据えながら、苦心するところに福音の園が目指す「希望への支援の実践」がある。』

（本誌第１７号　２００６年５月発行・抜書）

Sさんの心には「心配している父母が生きている」。このような人を**【かわいそうに認知症で「現実」が見えなくなっている】**と気の毒がるけれども、果たしてそうだろうか。「健常者」と呼ばれる人の方が、本当はもっともっとかわいそうなのではないか？原体験・生まれ故郷への郷愁が醸し出す「優しさ」に生きることができず、「ありがとう」、「ごめんなさい」が素直に言えない。刺々しい言葉しか持てない。子供達のいじめ、大人達のいじめの陰湿さ。

認知症により「現実認識能力」が欠損したとしても忘れがたき故郷に生きる能力」は健在している。「父母が心配しているから帰る」と云う「優しさ」を私たちは見失ってしまった。昔、『介護者教室』で**『父と母を敬いなさい。そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きることができる』**（聖書）を解説しながら参加者にお話しした。**「そうすれば」**を強調し、「老親の幸福とあなたの幸福は表裏一体。相反するかに見える二つが根本では密接につながっています」と。意見交換のとき「そうは言われても、私の父は敬うに値しません！」と返され 閉口した。

「茨城弁で詞を書く」、「メロディーを自分の言葉で書く」、「栃木弁で曲を作る」とは、失いかけた「生まれ故郷への郷愁が醸し出す優しさ」を、もう一度取り戻すための「心のいとなみ」ではないだろうか。

「言葉の力は仕事の力」。「優しさ」と表裏一体な「茨城弁、栃木弁」に代表される「馴染みの話し言葉」で「心に触れる優しい支援」を実践していきたい。

『「外出時に転倒に注意する」でなく、「そとさ、でるは、けつまずかないようにすっぺ」と言うという茨城弁の表現もいいのではと推奨していた時もありましたが、（中略）**ケアプランに書くかどうかは、公式に出来ずとも、自分の馴染んできたふるさとの言葉があってこそ、伝わっていくものはありますので、認知症の人には余計に大事にしたいケアを探求していこうと思います。』**

（本誌第１５１号「お便り紹介」欄・抜書）